

## 創造的表現活動のための音楽研究

— 身体表現への音楽の「きっかけ」調査 —

井 中 あけみ  
高 橋 うらら\*

### I. はじめに

保育者養成校の学生が学修する「表現」とは、大凡「身体・言葉・音楽・造形」の4つを指すといえよう<sup>1)</sup>。これらの表現活動は、個々の専門教員が、子どもたちの表現を踏まえた指導を行い、さらに学生たち自身が、指導力を身に付けることができるよう導いていくことが必須の課題といえる。

幼児期には、「身体・言葉・音楽・造形」など色々な領域が設定されていても、それらはひとつながりの表現として現れる場面が多い。聴こえてくる音楽に合わせて踊ったり、踊りながら独自の歌をつくったり、歌っているうちに絵を描き始めたりなど、子どもたちの創造力はあらゆる角度から湧き起こる。高名な研究者たちは、このような子どもたちの創造的な模倣遊びを感知し、創造性豊かな、調和のとれた心身の発達を目指した数多くの表現活動研究を行ってきている。

筆者（井中）は保育者を目指す学生に「幼児の音楽表現の指導」についての授業を担当しているが、それはその他の授業の「表現」と連動していることが多い。特にその中でも身体の動きと音楽は密接な関わりをもっていると考えられる。これは、身体表現と音楽表現が別々の表現の方向性を持ちながら、リズムという共通要素が、動きと音楽を協応させるからといえる。平井<sup>2)</sup>は、これらのことを、「身体の運動が音声や音のリズムを誘発するように、音声や音（音楽）のリズムが身体の運動を容易に紡ぎだす」といっている。また身体経験を通して音楽を学習する教育を提唱するヒーザー・ジェル<sup>3)</sup>は、「動作を通してリズムを理解し、それから音楽にいたるであろうし、あるものは音楽から動作に至る」としており、音楽学習は「音楽の奏法」のためだけでなく、人間のあらゆる表現への創意や応用力を高めていくためのものとしても考えていく必要がある。

また、舞踊の分野においては、松本が、松本千代栄撰集の「4 舞踊発想と音楽」の中で、音楽が舞踊に対して与える効力について、学習法を細かく示しており、「音楽のもつ力」<sup>4)</sup>

\* 東京都市大学 人間科学部 児童学科 准教授

1) 保育所保育指針表現（音楽）、幼稚園教育要領「表現」抜粋、保育士養成課程等検討会「保育士養成課程等改正について」（中間まとめ）『保育士養成課程等検討会』

2) 藤井知昭監修、野村雅一・鈴木道子著『民族音楽叢書 9 身ぶりと音楽「第5章 身体運動と音楽」平井タカネ文筆』p.109、東京書籍、1990年

3) ヒーザー・ジェル著『音楽と動き』p.13、全音楽譜出版社、1983年

4) 舞踊文化と教育研究会編著『松本千代栄撰集 4 巻「舞踊発想と音楽」』p.252、2008年

や、「動きと音の不即不離の韻律世界」<sup>5)</sup>などの表現を数か所に用いている。また松本は、「一前略一 とりわけ、教育の場における発達と身体表現の基底を考えると、生命を湧きたたせ、動きを誘発する。動きと音との融合関係を探求することは、人間と表現、人間と運動を考える分野にとって根幹の問題であるだろう。」と述べている。

本研究では、保育者を目指している学生たちにとって、音楽は身体表現活動にどのような関わり方をするのか、音楽が身体活動に与える「きっかけ」は何かを調査するため、保育者養成校の学生を対象とした意識調査・実験・考察を行ったものである。これらの結果を踏まえ、保育者を目指す学生たちにとっての総合的な「表現」の学びに応用・発展できる「音楽指導法」の充実に努めたい。

## II. 目的・方法

### 1. 研究目的

本研究は、表現「音楽」と「身体」が、協同・協応できる保育者養成のための「音楽表現活動」を考えるためのものである。それは、子どもに寄り添った、自分なりの音楽表現活動の学びを発見・確認することでもあるといえる。

### 2. 研究内容

保育者養成校の学生たちが、音楽と身体とで「身体表現活動」を行う際、表現の「きっかけ」はどちらにあるのか。「動き（身体表現）」と「音（音楽）」の2点について「即興創作表現」による実験調査を行った。また、「即興」という行為については、表現への完成のために時間をかけると、被験者の目的が変わる可能性があるため、よりシンプルな調査方法として、即興表現での実施を選択した。

- (1) 身体表現を行う際、「音楽」か「動き」か、どちらを「先」にきっかけとするかについての意識調査を行う。
- (2) 学生たちの「身体」と「音楽」の関わり方への質問紙法による事前アンケート・調査と身体表現の実験・観察、さらに実験後のインタビューアンケートを通して、身体表現に対する音楽の効果や不具合への意識調査を行う。

### 3. 研究方法

実験は三か所の大学にて行い、一回目を実験1としA大学で、二回目は実験2としB大学で実施した。また比較対象実験として、C大学の身体表現（ダンス）を得意とする学生の調査・実験を行った。

#### (1) 対象

調査対象

〈実験1〉A短期大学保育者養成2年生18名

調査日：平成24年12月11日

---

5) 舞踊文化と教育研究会編著『松本千代栄撰集 4巻「舞踊発想と音楽」』p.268

〈実験2〉 B大学保育者養成1～4年生6名（1年生4名，3年生1名，4年生1名）  
 調査日：平成24年12月22日

比較対象

〈実験3〉 C大学（体育学部の学生を含むダンス部員）1～4年生16名  
 （1年生5名，2年生1名，3年生4名，4年生6名）  
 調査日：平成25年11月12日

## （2）方法

- ①事前アンケートを質問紙法で実施する。
- ②学生一人ずつ実験室に入室する。（他の学生とは接触しない）
- ③検者2人はビデオ撮影と音響CDを担当。
- ④事後の自由記述・インタビューアンケート実施。

注意：この実験は，時間をかけた完成作品発表のための「身体表現」ではなく即興創作表現で行う。

## Ⅲ 実験内容

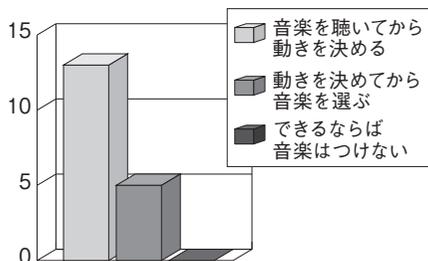
### 1. 実験1

#### （1）事前アンケート結果〈A短期大学保育者養成2年生18名〉

A短期大学保育者養成2年生18名は，「身体表現を行う際，テーマを決めた後に，まず始めに次のどれを選択しますか」の質問に，72%が音楽と答えている。

質問：身体表現を行う際，テーマを決めた後に，  
 まず始めに次のどれを選択しますか

音楽を聴いてから動きを決める	13
動きを決めてから音楽を選ぶ	5
できるならば音楽はつけない	0
合計	18

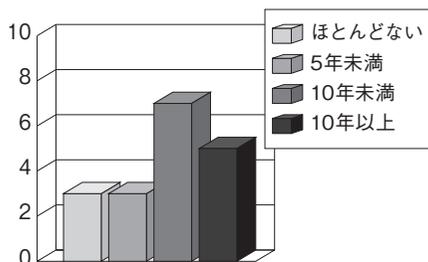


ここでは，学生の音楽歴がダンス歴よりも長いことや，身体表現という言葉自体の馴染みがないため，音楽に偏りがちの回答を得たのではないかという疑問があった。以下がその経験年数のアンケートである。

〈音楽歴について〉

・大学以外での音楽歴について

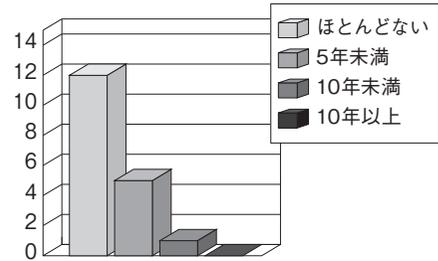
ほとんどない	3
5年未満	3
10年未満	7
10年以上	5
合計	18



## 〈身体表現（ダンス）歴〉

・大学以外での身体表現歴について

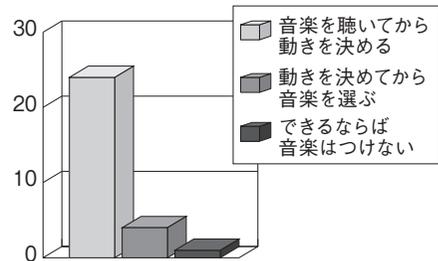
ほとんどない	12
5年未満	5
10年未満	1
10年以上	0
合計	18



参考資料：〈A短期大学他学科2年生29名〉

保育者養成学生以外の他学科学生2年生へ同じ内容にてアンケートを行った。音楽も身体表現も授業とは無関係な学生たちであるが、グラフは保育者養成学生とほぼ同じ形を作っており、ここでも音楽歴の方が豊富である結果と考えられた。

音楽を聴いてから動きを決める	24
動きを決めてから音楽を選ぶ	4
できるならば音楽はつけない	1
合計	29



## (2) 実験1—身体表現活動—

## ① 準備体操

実験は即興表現で行うため、身体表現の指導者（検者：高橋）による簡単な身体表現の準備体操を実施した。（緊張や萎縮などを和らげ、より自由な表現ができるようにするため）

- ・弛緩、緊張
- ・柔軟
- ・基本運動（歩行、走る、伸びる、寝る 等）

## ② 「動きのみでの身体表現（無音）」

方法：被験者各自に、実験室入室時にテーマを知らせた。テーマは「音もなく降る雪」とし、自由に30秒前後で表現を行った。

## ③ 「音楽を聴きながら身体表現を行う」

方法：被験者は耳馴染みのないピアノ曲2曲をCDで聴きながら、曲のタイトルは告知せず、思いついたままに自由に身体表現を行った。

【使用曲】ギロック「叙情小曲集」より<sup>6)</sup>

1. 海の風景 イ短調 (0' 41")
2. ダイアナの泉 変イ長調 (0' 59")

6) ギロック『叙情小曲集』17「ダイアナの泉」、2「海の風景」、ピアノ演奏グレンダ・オースティン、ビクターエンタテインメント、1998年

## ④ 実験観察記録

記録はビデオ撮影を行い、事後に検者が観察し分析評価を行った、評価基準は次の4項目とした。

以下の項目の3つ以上に該当するものは「動けた」、2つまでは「何とか動けた」、0は「動けない」と評価することとした。これは、宮本の「パフォーマンス評価のためのチェックリスト」<sup>7)</sup>を参照し、その中から抜粋したものを高橋（検者）がアレンジして評価を試みた。

1. 動きに変化があるか（高低・前後・回る等）。
2. 動きに変化があるか（速度・強弱）。
3. 空間を移動しているか。
4. 最後まで止まらずにひと流れの動きができているか。

〈観察記録〉

	動けた	何とか動けた	動けない
動きのみ「音もなく降る雪」	17	1	0
ダイアナの泉 変イ長調	10	6	2
海の風景 イ短調	8	5	5

この表の結果を見ると、事前アンケートでは、「音楽が先」の回答が72%であったにもかかわらず、音のついていない「動きのみ」の評価が高く、ほぼ全員が自由に自己の表現をしようとする動きがみられた。しかし1名のみについては、自称「ヒップホップ」の動きで表現を試みており、テーマには結びつかない結果となったため、「何とか動けた」に該当させた。また「音がある動き」については、長調と短調の特徴からか、不慣れとみられる短調の動きが止まってしまい、戸惑った様子を見せる学生が多くなり、日常における短調の曲への経験の乏しさが推察された。

## ⑤ 事後アンケート

質問：実験を終えてあなたは、次のどちらを選択しますか。

	実験後	実験前
音楽を聴いてから動きを決める	12	13
動きを決めてから音楽を選ぶ	6	5
合計	18	18

数字の移動の内訳は、次のとおりである。

〈実験前〉 音楽が先 (5名) → 〈実験後〉 動きが先  
 〈実験前〉 動きが先 (4名) → 〈実験後〉 音楽が先

7) 宮本乙女著「創作ダンス授業における学習者によるパフォーマンス評価の研究」  
 『お茶の水女子大学付属中学校 第34集』p.68,69, 2006年 所収

事前アンケートでは、音楽歴の長い学生は「音楽が先」を、ダンス歴の長い学生は「動きが先」を選択するという傾向となっていたが、事後に変更した学生5名と4名は、音楽歴やダンス歴に関係なく移動していた。これは学生たちが、実際に「即興創作表現」の活動を実施したことで、「音楽」と「動き」を別々に意識した結果といえよう。またそれは、次の事後インタビュー調査（内容自由）からも窺うことができ、音楽と動きを分化して意識したことへの不安な気持ちや違和感が、その選択の迷いを起こしていると考えられることができる。

#### ⑥ 事後インタビュー

〈実験前後とも動きが先派〉

- ・ A学生：音があると、その音楽に合う動きを必死で考えていることがよくわかった。身体表現の目的が変わってしまう気がした。
- ・ C学生：自分は音からではなく、テーマから動きを先（きっかけ）に考えていきたいと改めて確認した。

〈実験前後とも音楽が先派〉

- ・ B学生：音楽がない表現は何をしたらよいのかわからなくなる。
- ・ D, L学生：音楽を始めに聴いた方が表現する気持ちが膨らんでいくのがわかる。
- ・ I, M学生：身体活動をするには、音楽を聴けば聴くほどイメージが湧く。

〈不安（動き派・音派合わせて12人）〉

- ・ E, G, H, N学生：音楽から感じる何かに様々な動きがしたいが、気持ちのみが先行して、「もやもや」したまま思うように動けないのがもどかしい。
- ・ F, J, K, O学生：音楽に合わせて心が感じているまま自由に身体を動かしたいが、できない。

〈不満〉

- ・ 18名全員の学生：音楽は、活動前に2回程聴いたら、もっと動きが豊かに出きると思った。音楽を事前に聴くことがなかったから、「音楽が先」の基準に達していないと考え、選択できなかった。

#### ⑦ 実験1の反省点

⑥の〈不満〉については、被験者18名全員からの意見であり、それは学生たちの初めての即興創作身体表現であることから、検者の判断の誤りとも考えられた。この時点では、全員の学生が、「音楽の影響」を一番のヒントとしていることを語っており、初めて聴く音楽を、余裕をもって聴いていたなら、「音楽が先」を選択したのではないかと答えている。従って、B大学による実験2を行うに際して、若干の変更を必要と判断し、次の実験2を実施した。

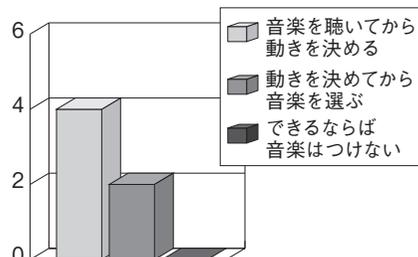
## 2. 実験2

### (1) 事前アンケート結果

〈B大学保育者養成1～4年生6名（1年生4名，3年生1名，4年生1名）〉

質問：身体表現を行う際，テーマを決めた後に，  
まず始めに次のどれを選択しますか

音楽を聴いてから動きを決める	4
動きを決めてから音楽を選ぶ	2
できるならば音楽はつけない	0
合計	6



上記のグラフはA大学と同じ傾向を辿っているといえる。

〈音楽歴と身体表現歴について〉

・大学以外での音楽歴について

全くない	3
5年未満	0
10年未満	2
10年以上	1
合計	6

・大学以外での身体表現歴について

全くない	3
5年未満	2
10年未満	0
10年以上	1
合計	6

### (2) 実験2－身体表現活動－

#### ① 準備体操

実験は即興表現で行うため，身体表現の指導者（検者：高橋）による簡単な身体表現の準備体操を実施した。

- ・弛緩，緊張
- ・柔軟
- ・基本運動（歩行，走る，伸びる，寝る 等）

#### ② 「動きのみでの身体表現（無音）」

方法：被験者各自に実験室入室時にテーマを知らせた。テーマは「音もなく降る雪」とし，自由に30秒前後で表現を行った。

#### ③※「音楽を聴きながら身体表現を行う」（実験1の変更箇所）

方法：始めに被験者は，耳馴染みのないピアノ曲2曲（実験1と同様の2曲）をCDで2回聴く。聴いている2回の間は動いても良いし，動かなくてもよい，自由な形で鑑賞する。3回目に思いついたままに自由に身体表現を行った。

#### ④ 実験観察記録

実験1と同様にビデオ撮影にて録画記録，実験1の評価基準と同様に分析評価を行った。

## 〈観察記録〉

	動けた	何とか動けた	動けない
動きのみ「音もなく降る雪」	5	1	0
ダイアナの泉 変イ長調	5	1	0
海の風景 イ短調	5	1	0

実験1に変更を加えたことにより、6人全ての学生は最後まで動きを止めることはなかった。「何とか動けた」の縦一列の1は、全て同じ学生で、全ての身体表現について同じ動きをしており、彼流の「ヒップホップ」を表現していた。従ってここでは、「何とか動けた」に該当させた。

全体的には、学生たちの動きのバリエーションは少ないが、空間をうまく使用し、音の高低、強弱や緩急など変化があり、それによって動きを工夫していた。

YやS学生は動きのバリエーションが多く、身体の各部位を使い全身で表現している。またそれぞれ3つの表現に特徴があり、イメージしていることが分かり易く明確に観察することができた。

## ⑤ 事後アンケート

質問：実験を終えてあなたは、次のどちらを選択しますか。

	実験後	実験前
音楽を聴いてから動きを決める	6	4
動きを決めてから音楽を選ぶ	0	2
合計	6	6

実験2では、実験後に6名全員が「音楽が先」を選択する結果となった。

## ⑥ 事後インタビュー

## 〈実験前動きが先派〉

- ・T学生：動きのみ「音もなく降る雪」は、情景をイメージして動作をしてはみたが、どのように動こうかと構えてしまう。（事後に動き先→音先へ選択変更）
- ・U学生：テーマからのイメージで動くことができて、平面的での動作のみを考えてしまい、気持ちに乗らない。（事後に動き先→音先へ選択変更）

## 〈実験前音楽が先派〉

- ・S学生：音楽のみは、テーマがなくても、音をきっかけに自分でテーマをイメージしていた。
- ・W学生：音の変化や、曲によっての速度や雰囲気それぞれ違うので、無意識に表現出来る気がした。

## 〈不安（6人全員）〉

- ・曲からのイメージで動きたいけれども動けない、もどかしさが恥ずかしい。
- ・身体の動きに対して、表現のためのバリエーションがないことに気がついた。

- ・もっと体の部位を色々使いたいのに、うまく連動させることが出来ない。

ここでの〈不安〉については、音楽を聴くことで何かを感じるが、身体を自由に動かすことができない自分に対しての苛立ちや、不安を述べる意見が全員からみられ、これまでの身体表現において、何気なく動いていたことを改めて確認している様子がみられた。このことは、実験1と同様、「音楽」と「動き」を別々に意識したことの結果といえよう。

### 3. 比較調査〈実験3〉

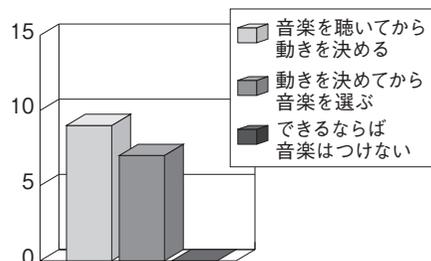
今回実験1と2は、保育者をめざしている学生たちの調査であるが、身体表現を得意としている「ダンス部」の学生たちは、「動き」と「音」についてどのように認識しているのか、同じ調査を試みた。（このC大学ダンス部は、全国のダンスコンクールに数々の入賞歴を収めている。

#### (1) 事前アンケート結果

〈C大学1～4年生16名（1年生5名，2年生1名，3年生4名，4年生6名）〉

質問：身体表現を行う際、テーマを決めた後に、  
まず始めに次のどれを選択しますか

音楽を聴いてから動きを決める	9
動きを決めてから音楽を選ぶ	7
できるならば音楽はつけない	0
合計	16



〈音楽歴とダンス歴について〉

・大学以外での音楽歴について

全くない	8
5年未満	2
10年未満	4
10年以上	2
合計	16

・大学以外での身体表現歴について

全くない	0
5年未満	6
10年未満	4
10年以上	6
合計	16

#### (2) 実験2－身体表現活動－

実験2の①，②，③については、同様に実施した。

##### ④ 実験観察記録

ダンス部の実験の評価は、当然ではあるが、16名全員が全ての動き（「音なし」「音あり」）に対して「動けた」（4項目全員がポイントできている）と高い評価となった。

保育者養成校の学生の動きは、何名かに同じようなパターンの動きが見られたのに対して、ダンス部の学生たちは、自分の感じ考える動きを表現できる身体表現を得意としていることから、その表現パターンの豊かさは大変興味深いものがあった。

ここでの観察は、検者が「音なし」「音あり」の2つの実験を観察・分析した結果、2つの表現には、動きの評価の優劣はないと判断できた。

#### ⑤ 事後アンケート

体育学部を含むダンス部の学生たちは、ダンス歴の豊かさに対して、音楽歴を全く持たない学生が8名いたが、事後アンケートでは、11名が「音楽を先」を選択変更している。

	実験後	実験前
音楽を聴いてから動きを決める	11	9
動きを決めてから音楽を選ぶ	5	7
合計	16	16

#### ⑥ 事後インタビュー

〈実験前後とも動きが先派〉

- ・ 4年生：音楽は動きの効果の一つとして捉えている。表現の足しとする。
- ・ 4年生：テーマから振付け、構成を考えた後しか音楽がイメージできない。

〈実験前後とも音楽が先派〉

- ・ 4年生：作品のイメージをふくらませるために音楽を先に聴きたい。
- ・ 4年生：即興の作品には音楽を聴いてヒントを得たい。
- ・ 2年生：動きを先に作ってしまうと、曲と動きがマッチしないかもしれないから。
- ・ 1年生：テーマから情景をイメージするので、曲によってその作品の心情面のイメージを膨らますことができるから。
- ・ 1年生：今まで音に合った動きを考えてきたので、今回も同じだった。
- ・ 4年生：音から得る影響は大変大きい。音を聴くと如何に動いたら良いのか、自分の動く姿を想像することが出来る。

〈実験前「動き」→実験後「音」へ変更〉

- ・ 3年生：実際行ってみたら、音を頼りにテーマのイメージを作り上げていたことがわかった。
- ・ 3年生：実際に動いてみると、動きや構成は音に頼っていたことがわかった。音を聴き、「間」や「形」のスタイルを決定している。

ここで変更を希望した学生も変わらなかった学生も、今回の実験の創作過程で、「動き」と「音楽」を別々に考察することで、自己の表現方法を振り返る言葉が多く聞かれた。

## IV 分析結果

実験1と実験2を終えて、保育者養成校24名の学生全員が「動きが先（音なしでテーマのみ）」の表現を行うことができたこと、検者は評価している。それは、テーマの設定をきっかけに動くことが可能であったといえるであろう。

ところが被験者の75%（合計24名に対して）が音楽をきっかけとする表現法が、より自己を表現できると考えており、変更を加えた実験2では、音楽を2回聴くことにより、学生たちの即興表現へのイメージが、より確実となって表現されていく様子が窺えた。

また、実験1、2、3において、「動き」と「音楽」を分けて考えることで、それぞれの「きっかけ」を意識する様子が見られた。これまで当然のように組み立てられてきた「音」と「動き」による表現であるが、今回の分化した調査での表現の振り返りは、それぞれの役割を意識できたことは間違いのないであろう。

さらに実験1と2のインタビューアンケートでは、音楽ありの「動き」に対して、24名中20名が「動き方のバリエーションが少ない」「表現のための身体の活用方法がわからない」などの歯痒さを訴えている。これらは、音楽から受けるイメージは、自分の「動き」をさらに豊かにできるはずであるという願望とも考えられる。また現時点では、音楽を聴いて感じたり、イメージしたりする力は、彼らの身体表現力の許容量を超えていたという見方もできよう。

検者の見識によれば、「音あり」と「音なし」の実験は、極端に表現の差はないと見受けられ、むしろ音がなくテーマのみを与えられて動く実験は全員が動けており、戸惑うことなく表現しているように見られる学生も数名いた。しかし何故殆どの学生が（推定全員24名）、「音楽」をきっかけとする動きを意識し、自己の表現を音楽から追求しようとするのか。

このことについて、検者は実験1と2の学生に、質問形式で以下のインタビューを行っている。

〈検者からの質問〉

質問：音楽からどのような「きっかけ」を感じ取るのか。

- a. 情景とか実在（物体など）するものを描くのではなく、音に感化されて感情（気持ち）が湧いてくることから、身体がより自然に自らの動きとして表現したくなる。
- b. 「動きが先でテーマのみ」の段階では、そのイメージが情景であったり、実在しているものを描こうという動きをするが、音楽を聴いてから動くと、自らの感情や時間の感覚に対しての表現を行ないたいという動作が加わる。
- c. 自分の心情やその時の精神的状態が曲のイメージに合うと、無意識に表現したいと感じる。
- d. 動くために手足を使おうとしているのが、「テーマのみ（音なし）の動き」と感じた。
- e. 音があると全身が自分の思いとして動きが流れていくような感じがする。
- f. 音がなしの時は、自分の中で音をイメージしていた（音楽をイメージして踊ろうとしていた）。

g. 音なしの時は情景が浮かんだ。音があるものは、悲しい・美しい・楽しいなどの心情や感情を表現したくなった。

これらの言葉からは、音楽から自分の感じたものを感情面から表出しようという、自然な創作意欲の方向性が感じられる。

実験中、検者は実験1と2で、身体表現の経験の少ない学生たちは、身体での表現は自信が持てず、音の流れに体の動きを何となく合わせれば動けるのでは、という安易なきっかけを音楽に求めているのではないかと、という懸念を持っていた。しかし今回比較調査として、身体表現を得意とする「ダンス部」の学生たちへの調査を実施し、そこでは、69%の学生が「音楽を先」と回答しており、その理由についても、保育者養成校の学生たちと同様な発言がいくつもみられる結果となった。

さてここで注目したいのは、何故上記のa～gのような感覚をもったのかである。音楽には、リズム・メロディー・ハーモニーという3つの要素があるが、これらの要素に、彼らの身体の動きは自然に同調してしまうと感じているのである。渡辺は<sup>8)</sup>、「音楽美の構想」の中で次のように述べている。「—前略—音の運動は決して蛇がはい回るような、一様で、変化のないものではない。初めがあり、終わりがあり、早くなり遅くなり、緊迫し弛緩し、また比喩的にいえば上昇し、下降し、つねに変化していく。それだからこそ我々は主体的に把握した際にそれがエネルギーとなるのである。そこに生命があり、またその構成や変化は「有機的」であるということも出来よう。」

さらに、ルードビヒ・クラークスは、『リズムの本質』の中で「音響と運動とのあいだにはいわばある精神的引力が働き、その結果リズム的音響はいずれもリズム的運動を引き起こし、リズム的運動はリズム的音響を引き起こす」といっている<sup>9)</sup>。また、松本は、舞踊創作と学習法についての中で、創作とイメージを豊かにひきだす練習として「—前略—動きのデッサンは、音楽のもつ力を動機として、舞踊的なイメージをひきだし、音楽のもつ感情性や発展性を支えとして、動きを自然に流出させようという練習である。」<sup>10)</sup>をメソッドとして挙げている。

これらのことから考えると、時に学生たちの創造的な身体表現活動への「きっかけ」は、その音楽が持っている力動性・多様性を感じることによって誘発されることがあるといえよう。つまり音楽には、聴く者の身体の動きを無意識に動かしてしまうエネルギーあるということになる。

学生たちの表現の学びは、これらのエネルギーを自分なりに感じ、個々の表現方法で「生命」を子どもたちに表現できるようになることである。その意味からも、今回の実験は、表現「音楽」と「身体」から、互いに影響し合う表現、分けて考える表現、融合する表現についての学生たちの意識を観察・確認することができたと考えている。また、学生たちの音楽

8) 渡辺 譲著『音楽美の構想』p.179, 音楽の友社, 1982年

9) ルードビヒ・クラークス著『リズムの本質』p.103, みすず書房, 1971年

10) 舞踊文化と教育研究会編著『松本千代栄撰集 4巻「舞踊発想と音楽」』p.252

学習については、それが単なるピアノ技術指導や童謡曲歌唱のレパートリーの確保だけでなく、表現活動が豊かに行える「音楽感知力」を養う学びを考えていかなければならない。

## V. まとめ

西・本山は、<sup>11)</sup>「その人らしい豊かな表現が芽生えるためには、何かを感じ考えるという営みが重要になる」といっている。

情報の入手が簡単に行える時代となり、学生たちの物事への関心や取り組み方、学習方法も変化している。それに伴い、人との関わりや自己表現に対しての変化も起こってきている。しかし、今回の実験では、西のいっている「何かを感じ考える」という働きに関心を持っている学生たちの様子がしっかりと窺えた。インタビューでは、「音楽の力」を借りて、身体表現に対してより豊かな自己の表現を行いたいという願望の声があった。また、ある者にとっては、音楽に「きっかけ」を求め、そこから自己の心情をより自然に、より大きく体で表現したいという発言もみられた。

音楽を中心とした身体表現の場合、しばしば「歌詞のついた音楽」に、言葉通りの振付をした動きで表現していることがある。メディアなどでも人気のある集団で動くダンスは、人との協同・協応するという集団での学びを期待することができよう。しかし、保育者を目指す者が忘れてはならないのは、自己の自然な心を表現する過程の思考や、その体験を重んじるということである。その中の子どもたちの表現の「きっかけ」となるものには、保育者の音的感知力（センス）も必要となる。ここでいう保育者ための音楽研究とは、教材による芸術的表現に偏らず、自発的な表現と寄り添い、学生自身の中に潜んでいる創造性豊かな表現力を引き伸ばしていくことに着眼しなくてはならない。それゆえ、我々指導者はその学びの根底に、保育者の表現技術としての音楽表現、子どもたちの発達に相応しい音楽表現、自然と寄り添っている音楽表現、そして何よりも保育者自身が豊かな創造性を持って子どもたちの成長に関わっていくための表現指導を忘れてはならないと考える。

今後さらに学生たちの表現力を高めるため、引き続き身体表現と音楽の関わりについて調査を行う。また音楽表現・身体表現の指導内容の充実を図るため、身体と音楽での融合表現について、より豊かな表現となるための楽曲パターンを調査する。さらにリズム、フレーズ、調性など具体的な分析を行い、保育者に必要な資質の向上に役立つプログラムを目指したい。

---

11) 西 洋子・本山益子著『子どもの身体表現』p.9, 市村出版, 2009年